

天眼鏡

『人新世の「資本論」』

“よくぞここまで書いた”という率直な読後感を抱かされたのが斎藤幸平著『人新世の「資本論」』（集英社新書）である。書評でもけっこう取り上げられつつあり、既にお読みの方もあろうかと思うが、本書の内容に賛同するかどうかは別として、現代に生きる人間としては、ここで提起された問題から目を背けることは許されない、ということで強いて本欄で本書についてご紹介しておきたい。

本書で言わんとしていることを凝縮すれば、「気候変動、コロナ禍・・・。文明崩壊の危機。唯一の解決策は潤沢な脱成長経済だ。」ということに尽きる。マルクスは『資本論』を執筆後、10年にわたって膨大な研究ノートを書き溜めたが、著者はこれを読み込みながらマルクスの到達点を探り、思索を巡らす。

まず問題の構図であるが、資本主義経済は「生産至上主義」を本性とし、過剰生産を繰り返すことによってその命脈を保持してきた。この「生産至上主義」は諸問題を発生せずにはおかないが、これを「外部」に転嫁することによって処理し、この「外部化」によって成長・発展を遂げてきた。例えば労働力は、移民や途上国の人民、さらには国内での格差拡大・貧困層の創出等、廉価な労働力を求めて「外部化」を進行させてきた。労働力にとどまらず資源、コスト、マーケット等々、「外部化」することによって延命を果たしてきたが、その結果、「外部」はどんどんと縮小・枯渇しつつあると同時に、最後に処理しきれない問題として残されたのが環境問題であり、その代表として地球温暖化、気候変動が位置づけられるとする。

気候変動対策について詳述するスペースはないが、2100年までの平均気温の上昇を、産業革命前の気温と比較して1.5℃未満に抑制していくことが求められている。しかしながら現在のペースで行けば、2030年には気温上昇が1.5℃のラインを越えてしまい、2100年には4℃以上もの気温上昇となることが懸念されてお

り、地球の持続そのものが困難になるとされる。

このために国連が旗を振ってSDGsを推進するとともに、各国で様々な対策が講じられ、また並行して様々な学術研究・提言等もなされている。しかしながら環境問題を筆頭とする諸問題の根本原因は資本主義にあり、これらは弥縫策でしかあり得ず、脱資本主義なくして実効のある対策は不可能だとする。

著者は、『資本論』執筆後のマルクスは、生産力至上主義を捨て、エコ社会主義をも脱却し、「脱成長コミュニズム」に到達したとみる。すなわち「貨幣や私有財産を増やすことを目指す個人主義的な生産から、将来的社会においては『協同的富』を共同で管理する生産に代わる・・・まさに<コモン>の思想」が息づく社会であってこそ”脱成長”は可能になるとしている。これを踏まえて著者は、持続可能な社会への転換は、労働・生産の場からの変革から始まり、そのカギを握る一つがワーカーズコープであり有機農業だとして未来を見据える。

ここで著者について触れておけば、現在、大阪市立大学の准教授。1987年生まれで、失礼ながらまだ33歳。『未来への大分岐』（集英社新書）での優れたインタビューでその実力を垣間見てはいたが、本書で自らの思想・経済学的全貌を示した形となっている。日本の大学には在籍しなかったようで、ベルリン・フンボルト大学で哲学の博士号を取得している。また先著『大洪水の前に』で「権威ある」ドイッチャー記念賞を歴代最年少で受賞している。稀にみる俊英が登場したということであるが、それにつけてもこうした人材は日本の大学では育ち得ない、海外だからこそその能力を膨らませることができた、という妙な納得感がある。

（農的社会デザイン研究所 蔦谷 栄一）